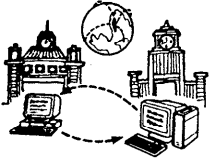


巻頭言



情報処理学会への一期待

春名 公一†



大中企業向けのホストコンピュータ，中小企業向けのオフィスコンピュータ，エンジニア向けのワークステーション，マニア向けのパーソナルコンピュータが代表的な計算機システムであった80年代から，1990年代に入って，計算機の使われ方が多様になってきている。

第1に，手軽に使える計算機としてのワークステーションやパソコンへのダウンサイジングは，我が国でも間違いなく進展している。第2に，特定のアプリケーションに特化して使われるシステムは，ソフト開発費の回収が十分に見込まれる分野であり，ワークステーションの活用により，ハードコストの低減に加えて，スケーラビリティなどのメリットも期待されている。第3に，パソコンなどをLANで接続して，ファイルやプリンタを共有するシステムは，従来の中小型機やオフコンを代替できるうえに，流通ソフトが使えればトータル費用も安くなる。これはLANで結合されたシステムの管理運用技術の進歩，およびあるレベル以上のシステム・ソフト人口の増加とともに普及していくと思われる。

以上のような変化は，計算機の利用主体や利用目的での大きな変化はなく，使われる計算機のハードやソフトが進歩するというマイナな変化（情報処理産業にとってはこれもメジャな変化であるが）であり，情報処理学会は今後も大いに貢献すると思われる，ところが，このようなマイナな変化とは別に，次のような大きな変化が予想されている。

その第1として，パソコンの利用者の底辺が拡大する徴候がみえてきている。米国のデフレ経済の影響下，パソコンの低価格のハードウェアが売り出され，さらに，ソフトウェアもマイクロソフト社の低価格攻勢に触発され，低価格化の動きが

みられる。ペン入力をジェスチャとして使うことにより使い勝手の大幅な向上も見込まれる。オブジェクト指向ソフト技術も一役を担うと期待されている。この底辺拡大を本物にするには，個人利用向け応用ソフトの新分野の開拓が望まれている。第2の大きな変化はグループによる活用である。グループで活動するには，ワークステーションやパソコンの計算機能とコミュニケーション機能の融合が大切である。マルチメディア化も大いに待たれる。しかし，我が国の職場では，グループで情報を共有し，お互いに協力しながら創造的な仕事をするという風潮がまことに乏しい。計算機や通信技術以前に，グループで仕事をする文化の育成が不可欠である。すなわち，一人一人の価値観を理解し合うとか，目的と手段を区別しその関係を体系的に認識し議論できるとか，代替案を多目的評価できるといったシステムズアプローチの教育の普及が必要である。第3の大きな変化は，家庭への計算機の普及である。我が国の低成長経済への移行にともないサービス産業のインフラへの投資が相対的に有利となることが予想され，CATV，ISDN，衛星通信などを利用した個人情報機器の普及が予想される。HDTVの普及とも共鳴すると思われる。この家庭への情報機器の普及は，通信インフラの発達と密接に関係する。

以上，この数年間に予想される市場の大きな変化を三つ並べてみたが，その普及のためには，

- 新しい応用ソフトの開拓
- システムズアプローチの教育と普及
- 通信インフラの発達へのコンセンサス作り

が大切である。我が国の情報処理分野の研究あるいは教育環境は，こうした期待に応えられるものに変身する必要がある，特に，当情報処理学会の積極的な対応が強く望まれる。